四国健康ナビ

心臓や血管にがんが生じることは非常にまれで、循環器内科医が日常診療でがんの患者さんを診ることはほとんどありませんでした。ところが、

徳島大学病院 循環器内科 山田博胤（ひろつぐ）特任教授

がん治療 心機能にも意識を

医療が進歩してがんを克服した人（がんサバイバーと言われます）が増えたこともあり、心臓病や血管病の患者さんの中にも、がんを患う方や、がん治療後の方が増加しています。また、がんを克服するための新薬が矢継ぎ早に開発され、がんの治療成績は良くなったのですが、その副作用として心筋障害、不整脈、血栓症などの循環器疾患が問題となっています。心臓に悪い薬を使わなければ良いと思うかもしれませんが、その副作用は必ずしも起こるわけでなく、がんにはよく効くため、がん治療医は副作用があることを知りながら使っているのです。

乳がんの治療薬にアントラサイクリン系抗がん剤とトラスツズマブという注射薬がありますが、このような治療薬を使っている人の一部で、心臓の筋肉の動きが低下し、心不全をきたしてしまう患者さんがいます。そのような患者さんの多くは、息切れや足の腫れなど心不全症状が出て初めて循環器内科に紹介いただくことがほとんどでした。私たち徳島大学病院循環器内科では、腫瘍循環器外来をスタートさせました。心毒性を持つ治療薬を使う患者さんの心機能を3カ月ごとにチェックして、症状が出現する前の心筋障害を検出し、早期に心保護療法を開始するという取り組みを3年前から行っています。この取り組みを始めてから、心不全で入院する乳がん治療中の患者さんは全くおいでません。

がん治療中の患者さんは、がん自体による血管の圧迫や、治療薬による血管障害、食欲不振（ガ）による脱水状態、臥床（ショウ）時間が長いことなど、多くの理由で血栓症が生じやすいと言われています。多くの場合、下肢静脈に血栓が生じます。そのような血栓症の治療も、循環器内科が得意としています。

これまでがんとあまり関わってこなかった循環器内科医が、がん患者さんを診る時代となっています。がんと言われたら、心臓や血管のことも少し気にしておいてください。